

グロービッシュの求める構文・文法と日本人の構文・文法力

How are the Grammar Items of ‘Globish’ Different from What is Taught in Japanese Schools ?

(2011年3月31日受理)

大橋 典晶 橋内 幸子 佐生 武彦 竹野純一郎
Noriaki Ohashi Sachiko Hashiuchi Takehiko Saiki Junichiro Takeno

Key words : グロービッシュ, 構文 文法, 学習指導要領

概 要

本研究では、「グロービッシュ」の構文・文法を取り出し、日本の中・高等学校で英語を学んだ日本人がグロービッシュを学ぶ際に、中・高等学校で学んだことがどこまでグロービッシュの学習内容と重なるのかを調べた。その結果、中・高等学校学習指導要領に示される内容を身に付けていれば、グロービッシュで必要とされる内容は十分身につけていると考えてよいということが分かった。また、中学校の学習内容だけでも、グロービッシュの大半の構文・文法の項目がカバーされることが分かった。

はじめに

平成23年4月は、日本の英語教育にとって新時代を画する時となるだろう。というのは、公立小学校に『外国語活動』が新たに導入・実施され、すべての5年生・6年生が外国語（主として英語）を体験し、慣れ親しみ、コミュニケーション能力の素地を養う授業の時間ができたからである。これまでも、各小学校の取組として英語活動が行われてきたが、小学校学習指導要領に正式に位置づけられた意義は大きい。

これに続いて、平成24年度からは中学校の英語の時間が3年間で12時間/週に増加する。さらに、高等学校では、平成25年4月1日の入学生から年次進行により、新学習指導要領が段階的に適用され、新科目が実施に移される。

このように国として英語教育を推進しているのは、社会や経済のグローバル化に伴って、国際協力が求められ、国際競争が加速していることが背景にある。

では、日本語を第一言語とする日本人が使えるようになるべき英語はどのようなものであろうか。本稿では、

この問題を考える手がかりとして、「Globish」（以下、「グロービッシュ」という）を取り上げる。グロービッシュとは、『週刊東洋経済』では、「ビジネス用に開発した簡易版の英語。簡単に言えば、ブロークンイングリッシュを体系化したもの」で、「必要な語彙は1500語、構文はシンプル、複雑な文法や発音もいらないため、1年程度でものにすることができる」（40）とされている。ここには、「語彙」、「構文」、「文法」、「発音」が言語の構成要素として取り上げられているが、本稿では「文法」と「構文」に着目し、日本人が高等学校までの学校教育制度の中で学ぶ項目をグロービッシュのそれと比較することによって、日本人が学校で身に付ける「構文力」「文法力」（以下「構文・文法力」と呼ぶ）の程度を明らかにし、グロービッシュを学ぶにはどのような項目を学習することになるのかを考察する。

1 グロービッシュの概観

McCrum(2010)が指摘しているように、グロービッシュとは、1995年にJean-Paul Nerriere (以下「ネリエール」と呼ぶ)が造語として作り出した用語である(209)¹。ネリエールら(2009)が示している哲学として最も重要であると考えられるのは、コミュニケーションの成立に責任があるのは情報を出す側と受け取る側の両方であり、たとえその一方が英語の母語話者であったとしても、その責任から逃れられないということである。つまり、コミュニケーションを成立させようとするならば、互いが歩み寄り、母語話者もグロービッシュで伝達しなくてはならないのである。したがって、母語話者もグロービッシュという言葉に「学ぶ」必要があることになる。(59-60)

さて、ネリエールら(2009)から、言語体系としてのグロービッシュの特徴を8点にまとめてみると、次のようになる(81-88)。なお、ここで用いている「英語」という用語は、「いわゆる標準的な英語」という意味である。

- (1) 正しい英語である。ただし、制限を設けた「閉じた体系」である。
- (2) つづりは、英語のつづりを使う。文字は、アルファベットである。
- (3) 発音は、英語に似た音を使う。「なまり(地域、母語等によるもの)」は許容する。ただし、語強勢は正しく身に付ける必要がある。
- (4) 文法は、英語の基本的文法を使う。「時制」、「態」、「法」の数は英語より少ない。可能な限り受動態を使わず、能動態で表現する。
- (5) 語彙は1500語である。ただし、次の方法で5000語まで拡大できる。1) 同じ語を複数の意味で使う 2) 語を組み合わせる 3) 接頭辞・接尾辞を加える 4) 句動詞として使う。
- (6) 1文の長さを15語以内に作る。
- (7) ボディーランゲージ、実物・写真などの視覚的助けを使う。
- (8) ユーモア、例示、慣用表現は、避けるか、特に注意しながら使う。異文化間では理解されないこともあるし、誤解されることもある。

上記(1)～(8)の中で、本稿で扱うのは主として(4)である。(1)と(6)も部分的には関連がある。

¹引用の原文が英語の文献については拙訳である。以下同様。

2 文法項目の調査・比較検討の方法

グロービッシュの文法は、英語の基本的文法を使い、「時制」、「態」、「法」の数は英語より少ない。そして、可能な限り受動態を使わず、能動態で表現するという特徴があることを前節で述べたが、ネリエールら(2009)の記述は、グロービッシュ「について」のものであり、標準的な英語との類似性を示しているにすぎない(111)。つまり、グロービッシュを構成する構文・文法について、詳細が示されていないのである。

この詳細の情報を得るために、ネリエールら(2009)の紹介している(118)インターネット上の有料講座の内容を見るのが有効であろうと考えた。「Globish IN Globish-Interactive Online Course (以下、「GNG」という)」の利用権を購入して、提供される教材にどのような構文・文法の項目が含まれるのか、どのような順に提示されるのかを調べた。

一方、高等学校までの学校制度の中で学習する構文・文法の一覧表は、中・高等学校学習指導要領解説を基にした。中学校学習指導要領にあっては、第2章第2節の2「内容」の(3)「言語材料」のエ「文法事項」に示されるものと、高等学校学習指導要領にあっては、第1部第3章2のイ「文構造のうち、運用度の高いもの」及びウ「文法事項」に示されるものとをひとつのリストにし、それぞれの項目がGNGのコースのどの時期に出現するかを調べた。

3 調査結果

調査の結果は表1及び表2のとおりである。

表1は、GNGのレッスン一覧である。レッスンAから始め、レッスンZへと進んでいくように計画されている。英語の部分はGNGの講座が示している各レッスンの内容で、その右に日本語訳をつけた。この表を見ると、文法項目によって内容が示されているが、必ずしも、構文・文法中心の内容となっているわけではない。各レッスンの構成は共通で、2つのパートからなる。ひとつは、「New Words」と呼ばれる、音声付テキストの部分である。この中では、レッスンごとにひとまとまりの文章(物語)が読み上げられ、語彙の学習を行えるように構成されて

いる。もうひとつは、「Grammar Music」と呼ばれる文法演習コーナーである。表1に示されている項目について、

簡潔な説明を読んだ後、単語を並べ替えて単文をつくるというドリルを画面上で行う。

表1 GNGレッスン内容一覧

Lesson	英 語	日 本 語
A	S+AM/IS/ARE	Be動詞（現在形）
B	S+AM/IS/ARE+V1+ING: Present Continuous	現在進行形
C	S+HAVE GOT	「～を持っている」の表現
D	Possessive Pronouns, Plurals	所有代名詞, 複数
E	S+CAN+V1	助動詞CAN
F	Prepositions in Time and Place	時と場所に関する前置詞
G	S+WILL+V1: Future Shortcut; Future Simple	単純未来形
H	S+V1, Present Simple	単純現在形
I	Imperative: Don't look!	命令形
J	THERE IS/THERE ARE+S	There is/are構文
K	Pronouns as Objects	目的格の代名詞
L	S+WAS/WERE; S+V2: Past Simple	単純過去形
M	S+HAVE/HAS+V3: Present Perfect	現在完了形
N	(Mid-Point Review of A-M)	(中間の復習)
O	TO+V1: Infinitive	To不定詞
P	S+HAVE/HAS+BEEN+V1+ING: Present Perfect Continuous	現在完了進行形
Q	Relative Clauses: That, Which, Who	関係詞節
R	Past Continuous: S+WAS/WERE+V+ING	過去進行形
S	Adverbs: Comparative, Superlative	副詞: 比較級, 最上級
T	Past Perfect: S+HAD+V3	過去完了形
U	Modal/Helping Verbs	助動詞
V	Conditional: IF Clause+2nd Clause	条件文
W	Modal/Helping Verbs: Conditional	助動詞: 条件節 仮定法
X	Passive Voice: BE+V3 - was heard, is not included	受動態 (was heard除く)
Y	Future Continuous: S+WILL+BE+V+ING	未来進行形
Z	Future Perfect: S+WILL+HAVE+V3	未来完了形

表2は、中・高等学校学習指導要領に示された構文・文法の項目別に、それぞれの項目がGNGのレッスンではどこの「Grammar Music」で扱われるのかが、「GNG Lesson」の欄にA-Zの記号で示してある。なお、「A以下」の表記は、明示的に説明やドリルがなされるわけではないが、理解されて身に付いていることが暗黙の了解とされていると考えられる場合である。また、「New Words」と「Grammar Music」の両方を見たとき、それぞ

れの項目が最初に出現するのはどのレッスンであるかが、「初出」の欄に示してある。「例」は、学習指導要領解説に示された例文である。

なお、考察の際の参照を容易にするため、表の左端に通し番号を振った。その右の欄は、中学校/高等学校の区別を「中」「高」で示している。「備考」欄は、GNG Lesson以外で扱われている場合、及び学習指導要領に示されていない事項の具体的内容を記した。「Parts of

Speech] や「Tense Master」は、レッスンには組み込ま
ムのようなものである。
れていないが、必要に応じて参照するための、特集コラ

表2 学習指導要領の文法項目から見たGNG Lessonの内容

No	中 ／ 高	文法項目 (学習指導要領)	例 (学習指導要領解説から)	GNG Lesson	初出	備 考
	中	(ア)文				
1	中	a 単文	Paul has a guitar.	A以下	A	
2	中	a 重文	Tom went to the supermarket, and his wife stayed home.	R	A	Parts of Speech -7. Conjunction
3	中	a 複文	I didn't go out because it was raining.	R	A	Parts of Speech -7. Conjunction
4	中	b 肯定の平叙文	Bill has three cats.	A以下	A	
5	中	b 否定の平叙文	Emi doesn't like baseball.	A以下	A	
6	中	c 肯定の命令文	Walk slowly, please.	I	A	
7	中	c 否定の命令文	Don't run here.	I	D	
8	中	d 疑問文のうち、動詞で始まるもの	Is this your classroom?	A以下	A	
9	中	d 疑問文のうち、助動詞 (can, do, mayなど) で始まるもの	Do you walk to school?	C, E, G, H, L, U	A	
10	中	d 疑問文のうち、orを含むもの	Would you like tea or coffee?			
11	中	d 疑問文のうち、疑問詞 (how, what, when, where, which, who, whose, why) で始まるもの	What did you have for breakfast this morning?	A	A	
	中	(イ)文構造				
12	中	a [主語+動詞]	Yukio walks to school.	A以下	A	
	中	b [主語+動詞+補語]のうち、				
13	中	(a)主語+be動詞+名詞/代名詞	The pen on the desk is mine.	A	A	
14	中	(a)主語+be動詞+形容詞	This game is exciting.	A	A	
15	中	(b)主語+be動詞以外の動詞+名詞	The boy became an astronaut.		D	
16	中	(b)主語+be動詞以外の動詞+形容詞	You look nice in that jacket.		D	
	中	c [主語+動詞+目的語]のうち、				
17	中	(a)主語+動詞+名詞/代名詞	I like apples very much.	K	A	
18	中	(a)主語+動詞+動名詞	They enjoyed talking together yesterday.		B	
19	中	(a)主語+動詞+to不定詞	He tried to do his best.	O	B	
20	中	(a)主語+動詞+how(など)to不定詞	My grandfather knows how to use the computer.		J	

21	中	(a)主語+動詞+thatで始まる節	We didn't know that she was ill.	Q	A	
22	中	(b)主語+動詞+whatなどで始まる節	I don't know what he will do next.	Q	B	
	中	d [主語+動詞+間接目的語+直接目的語]のうち,				
23	中	(a)主語+動詞+間接目的語+名詞/代名詞	The teacher told us an interesting story.		A	
24	中	(b)主語+動詞+間接目的語+how(など) to不定詞	I taught him how to send e-mail.		P	
	中	e [主語+動詞+目的語+補語]のうち,				
25	中	(a)主語+動詞+目的語+名詞	We call him Ken.		K	
26	中	(a)主語+動詞+目的語+形容詞	Her smile always makes us happy.		B	
	中	f その他				
27	中	(a)There+be動詞+～	There is an old tree in front of my house.	J	A	
28	中	(b)It+be動詞+～(+for～)+to不定詞	It is fun to travel to new places.		N	
29	中	(c)主語+tell, wantなど+目的語+to不定詞	Our teacher told us to go out and enjoy the break.	O	A	
	中	(ウ)代名詞				
30	中	a 人称を表すもの	I, you, mine, yours, his	D	A	
31	中	a 指示を表すもの	this, these		A	
32	中	a 疑問を表すもの	what, who		A	
33	中	a 数量を表すもの	some, few, much		A	
34	中	b 関係代名詞のうち, 主格のthatの制限的用法	Yuki bought a doll that had large beautiful eyes.	Q	H	
35	中	b 関係代名詞のうち, 主格のwhichの制限的用法	The animal which runs the fastest is the cheetah.	Q	J	
36	中	b 関係代名詞のうち, 主格のwhoの制限的用法	Is that the man who was in the park yesterday?	Q	B	
37	中	b 関係代名詞のうち, 目的格のthatの制限的用法	These are the pictures that he painted in the country.	Q	O	
38	中	b 関係代名詞のうち, 目的格のwhichの制限的用法	This is the dog which I like the best.	Q	D	
39		b 接触節	This is the mountain I climbed last year.	Q	A	
	中	(エ)動詞の時制など				
40	中	現在形	We are tired and sleepy.	H	A	
41	中	過去形	He was in China last year.	L	A	
42	中	現在進行形	Hanako is opening the present.	B	B	

43	中	過去進行形	Taro was kicking a ball.	R	A	
44	中	現在完了形	He has lived in London for two years.	M	A	
45	中	助動詞などを用いた未来表現	It will be fine tomorrow. Shall I help you?	G	A	
46	中	(オ)形容詞及び副詞の比較変化	tall-taller-tallest, good-better-best, slowly-more slowly-most slowly	S	D	
47	中	(カ)to不定詞	To learn a new language is difficult.	O	A	
48	中	(キ)動名詞	We enjoyed dancing together.		C	
49	中	(ク)現在分詞の形容詞としての用法	He wants to learn spoken Japanese.	Q	B	
50	中	(ク)過去分詞の形容詞としての用法	This is a book written by Soseki.		G	
51	中	(ケ)受け身	Judo is enjoyed by many people in the world.	X	A	
	高	イ文構造のうち, 運用度の高いもの				
	高	a [主語+動詞+補語]のうち,				
52	高	(a)主語+be動詞以外の動詞+分詞	The old man sat surrounded by children.		T	
	高	b [主語+動詞+目的語]のうち,				
53	高	(a)主語+動詞+ifで始まる節	I wonder if you are free today.		B	
	高	c [主語+動詞+間接目的語+直接目的語]のうち,				
54	高	(a)主語+動詞+間接目的語+thatで始まる節	She told me that she had been busy.		K	
55	高	(b)主語+動詞+間接目的語+whatなどで始まる節	Please tell me what you want.	Q	G	
56	高	(c)主語+動詞+間接目的語+ifで始まる節	I asked her if she was free.			
	高	d [主語+動詞+目的語+補語]のうち,				
57	高	(a)主語+動詞+目的語+分詞	I saw the man crossing the road.		B	
58	高	(b)主語+動詞+目的語+原形不定詞	My father made me wait outside.		D	
	高	e その他				
59	高	(a)主語+seemなど+to不定詞	We seem to have a new teacher.		F	
60	高	(b)It+seemなど+thatで始まる節	It seems that we have a new teacher.		I	
	高	ウ文法事項				
	高	(ア)不定詞の用法				
61	高	原形不定詞	—		D	
	高	(イ)関係代名詞の用法				
62	高	関係代名詞what	—	Q	G	

63	高	非制限的用法	—		D	
64	高	(ウ) 関係副詞の用法	—		B	
	高	(エ) 助動詞の用法				
65	高	助動詞の過去形	could, might, would	V, W	B	
66	高	助動詞を含む受け身表現	—	X	W	
67	高	助動詞と完了形を用いた過去に関する推測の表現	—	W	V	
	高	(オ) 代名詞のうち, itが名詞用法の句及び節を指すもの				
68	高	itを形式的に主語として用いるもののうち, itが名詞用法の節を指すもの	—		O	
69	高	itを形式的に目的語として用いるもののうち, itが名詞用法の句及び節を指すもの	—		G	
	高	(カ) 動詞の時制など				
70	高	現在完了進行形	—	P	C	
71	高	過去完了形	—	T	G	
72	高	(キ) 仮定法	—	V, W	G	
73	高	(ク) 分詞構文	—		A	
74		学習指導要領に示されていない事項		C	D	HAVE+GOT
75		学習指導要領に示されていない事項		D	A	名詞の複数形
76		学習指導要領に示されていない事項		E	A	所有の's
77		学習指導要領に示されていない事項		F	A	時と場所の前置詞
78		学習指導要領に示されていない事項		Y	I	未来進行形
79		学習指導要領に示されていない事項		Z	Tense Master	未来完了形

4 調査結果の考察

表2に示された結果を見ると, 次の3種類に特徴を分類できる。なお, 各項目に最後に示している数字は, 表2の左端「No.」に示されている数字である。

- (1) 学習指導要領には示されていないが, GNG Lessonでは「Grammar Music」で明示的に扱われている事項(74-79)
- (2) 学習指導要領には示されているが, GNG Lessonでは, 「Grammar Music」でも「New Words」でも扱われていない事項(56)

(3) 学習指導要領には示されているが, GNG Lessonでは, 「Grammar Music」で明示的には扱われていない事項, ただし, 「New Words」の英文には用いられているもの(15, 16, 18, 20, 23-26, 28, 31-33, 48, 50, 52-54, 57-61, 63, 64, 68, 69, 73)

- (4) 学習指導要領に示され, GNG Lessonでも扱われていると考えられるが, 語順の根幹の部分(S+Vなど)については「暗黙の了解」事項とされているように感じられるもの(1, 2, 3, 4, 5, 8, 12)

これらの特徴を1項目ずつ検討し, 日本の中・高等学校で目標としている構文・文法力と, グロービッシュが

目指している力の違いを考察する。

まず、(1)についてNo. 74-No. 77の4項目については、日本の中・高等学校の教室では、構文・文法というより、語彙に近いとらえ方をしている。No. 74のHAVE+GOTは所有を表すhaveの口語的表現となる成句として、No. 75, 76の名詞の複数形と所有形については名詞の変化形として、No. 77の時と場所の前置詞については単語としてとらえている。その上で検定教科書にも盛り込まれているし、授業でも取り扱われている。したがって、(1)に分類される特徴については、学習指導要領に示されていないことが、学校で教える内容ではないことを意味しているのではなく、学習の中でどの程度重要視するか、あるいはどの程度の時間をかけるかということと関わってはいるが、中・高等学校でもグロービッシュでも必要な項目であるということに変わりはない。

次に、(2)について、No. 56の「主語+動詞+間接目的語+ if で始まる節」をGNG Lessonで扱わないことについては、No. 53の「主語+動詞+if で始まる節」を「New Words」に出現させることによりifの用法が学習されれば、No. 56にも転移すると考えていると推測される。この考えは合理的であると思われるので、(2)の特徴についても、中・高等学校でもグロービッシュでも必要な項目であるということに変わりはない。

(3)については、該当の項目それぞれについて、関連するものは合わせて取り上げながら、考察を行いたい。

まず、ある程度の合理性があると考えられるものから記述する。No. 15, 16, 23, 24, 25, 26については、SVC, SVO, SV00の構文であることが重要ではあるが、動詞(become, lookなど)の用法の追加であるにとらえることも可能で、語彙の問題であると考えられたとしても合理的であると思われる。さらに、No. 20, 24については、how to ~を成句にとらえれば、これも語彙の問題であると考えることができる。No. 31-33は、語彙のグループ化に過ぎないので、「Grammar Music」で明示的に扱う必要性はあまり高くないと考えられる。No. 50については、ネリエールら(2009)が言うように、グロービッシュでは「受動態」を避けるという基本姿勢があるので、過去分詞の形容詞的用法を明示的に扱わなかったものと考えられる。しかし、No. 51で受動態(受け身)は扱うのだから、そこには若干の矛盾が感じられる。とういうのは、

現在分詞の形容詞的用法については、No. 49で示してあるように取り扱っているからである。No. 52の「主語+be 動詞以外の動詞+分詞」は、過去分詞を用いる場合はNo. 51の受け身のbe動詞が他の動詞に置き換わったものとも考えられ、ここでも受動態を避ける姿勢が見える。No. 53, 54, 59, 60については、SVO, SV00の構文に重点があるというよりは、ifやtell, seem等の用法の追加という語彙の問題と考えることも可能である。No. 63, 64の関係詞(非制限用法と関係副詞)については、No. 34-39で関係代名詞が身に付いていれば、明示的に扱う必要性は高くない。No. 28, 68, 69の形式主語、形式目的語のitの用法について明示的に扱わないのは、グロービッシュがこの構文を避けるという姿勢の現れであろう。

一方、No. 57, 58, 61, 73は、SVOCの構文などと深く関わる分詞と不定詞の事項であるが、準動詞(不定詞、分詞、動名詞)は全体像を明示的に示す必要があると考える。その意味で、No. 18, 48の動名詞に触れないのは、いかがなものか。現在分詞と動名詞の区別などはさほど重要ではないと思うが、~ingという形の用法を知ることが重要で、それと対比して、原形不定詞、to不定詞、過去分詞を扱うことは、準動詞の理解を促進すると考えられる。

最後に、(4)については、「Globish IN Globish-Interactive Online Course」に次の記述が見える(原文は英語)。

「GNGは、350語から500語の英語を読むことができる人で、グロービッシュ(筆者注：という言葉)ですべてを学んでグロービッシュを速くマスターしたい人のための講座です…」

つまり、英語がまったく分からない人は、300語から500語(レベル)の英語が読めるようになってからこの講座に申し込んでください、ということになる。この英語を読む能力を「暗黙の了解」として講座がスタートするのである。この能力を表2に当てはめてみると、No. 1, 2, 3, 4, 5, 8, 12については理解できる力である、ということであると推測できる。

日本の学校教育制度では、中学校までが義務教育である。表2から、中学校終了程度の構文・文法力でグロービッシュの学習を始めた場合、どの程度の内容が既習事項で、新出事項がどの程度になるかを考察してみると、高等学校の学習内容に属するNo. 52-73の22項目の

うち、GNG Lessonで明示的に扱われるのは8項目であることが分かる。つまり、高等学校特有の学習内容は、グロービッシュでは必要性が低い内容だと言える。言葉を換えれば、学ぶべき内容はあまり残っていないとも言える。また、No. 1-51の中学校の学習内容を学習していれば、GNG LessonのA-Zの25項目（Nは中間の復習であるので除く）のうち、19項目が既習ということになる（Fの「時と場所の前置詞」は学習することが明らかなので、既習の19項目に含めた）。このことから、日本で義務教育を受け、英語を学習して身に付けていけば、グロービッシュで必要とされる内容の大半はすでに学習していると言える。

5 ま と め

ネリエールが提唱したグロービッシュという言葉は、言語体系であると同時に哲学でもあると考える。すなわち、グロービッシュは、使用目的を限定し、「Return On English（英語に対する見返り）」を高く保ち、非ネイティブはより短期間で身に付けられる一方、ネイティブにもこれを身に付けることを求める、国際（ビジネス）社会が共通で所有するコミュニケーションの道具として提唱されたと言えるだろう。

本研究では、グロービッシュの構文・文法を取り出し、日本の中・高等学校で英語を学んだ日本人がグロービッシュを学ぶ際に、学校で学んだことがどこまでグロービッシュの学習内容（実際にはGNG）と重なるのかを調べた。その結果、中・高等学校学習指導要領に示される内容を身に付けていけば、グロービッシュで必要とされる内容は十分身につけていると考えてよいということが分かった。中学校の内容で、大半の学習は終えていると言ってもよい。高等学校で学ぶ内容を見れば、グロービッシュで必要とされる内容のほうが、明らかに少ないので、日本の中・高等学校で英語を学んだ日本人がグロービッシュを学ぶ際には、新たなことを学ぶというより、知識を実際に使うことを学ぶという態度のほうが重要であると考えられる。

お わ り に

今回の研究では、インターネット上のグロービッシュ講座を通してグロービッシュの学習に必要なとされる構文・文法の学習内容を調べ、日本の中・高等学校学習指導要領の内容と比較した。今後は、グロービッシュで書かれた文献を基に、この英文に含まれる構文・文法項目を調べ、グロービッシュが学習者・使用者に求める構文・文法力をさらに研究したい。

引用・参考文献

- McCrum, R. *Globish: How the English Language Became the World's Language*. VIKING. 2010.
- Nerriere, J. P. and Hon, D. *Globish The World Over*. International Globish Institute. 2009.
（インターネット上の講座）Globish IN Globish-Interactive Online Course. <http://www.globish.com/courses/>
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編（平成21年12月）』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiedfile/2010/01/29/1282000_9.pdf
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年7月）』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiedfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編（平成20年8月）』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiedfile/2009/06/16/1234931_012.pdf
- 特集/非ネイティブの英語術 『週刊東洋経済』第6282号（2010年9月18日号）38-87, 東洋経済新聞社, 2010年

